日米の中学校における相互理解と生徒の自己表現力について
―鳴門市第二中学校と米国ラグビーミドルスクールの比較を通して―

鳴門市第二中学校　教諭　　高　木　悦　子

(1)　はじめに

我が校では、各クラス平均月一回、AETとのティームティーチングの授業を行っている。平成12年度の2年生の英語の授業の中で、4コマ英語マンガを作成するという活動を行った。その時は2年生の行事の関係で2時間続けてティームティーチングを行った。この活動は、英和・和英辞書を使うことや、生きた英語を教えてもらったり、英語の表現力を身につけることを目標としていた。また、AETに質問することを通してコミュニケーションを図る機会と能力を身につけてほしいという願いもあった。英語は苦手であっても、芸術に秀でた才能を持っていたり、物語を作るのが上手だったりといった教科書を使った英語の授業だけでは見られない生徒の隠れた才能を見いだし、生徒のやる気につながればという私の願いも込められていた。生徒には、前もってあらすじやイラストを考えるという宿題を出した。授業では、普段の授業ではあまり発表をしない生徒が、アリス先生に質問し一生懸命単語を書いている様子が見られた。また、いろいろな創意工夫を凝らし、おもしろいあらすじを考えている生徒もいた。私は、生徒のできあがった作品を見て、この活動を通して新たに生徒の素晴らしさを発見した。多くの生徒が、感想の中に『英訳するのはとても難しかったが、とてもおもしろかった』と書いていた。

本校で、英語だけでなく国語や美術の領域を含んだ総合的な学習を実施したことにより、文化や環境の違う生徒はどのようなあらすじを考え、どのように表現していくのか知るだけでも興味深いのではないかと考え、今回GPSPの個人的な研究の題材として4コママンガ作成という活動を取り上げてみようと思った。日米の生徒の作品、作品の題材や作品が出来上がるまでの過程などを比較研究する中に、いろいろなものが反映されてくるのではないだろうか。

(2)　研究の概要

①　現地調査の日程

4コママンガ作成については、3月27日～3月30日の滞在のうち、30日のクリスティ先生の授業（国語・4時間目、5時間目、6時間目）に実施した。授業時間は60分で、生徒は全て7年生だった。カラーコピーした二中の生徒の作品をラグビーの生徒たちに見てもらった。ラグビーの生徒たちは、文通相手の生徒の作品を見て感動していた。

②　日米の生徒の作品比較から見えてくるもの

日本とアメリカの実施した学年や時間数に違いがあるので、正確な比較になっていないかもしれない。また年齢的、文化的な要因で美術的、言語的な表現力や思考的なものがかなり違うかもしれない。このことを念頭に置きながら、考察してみたい。

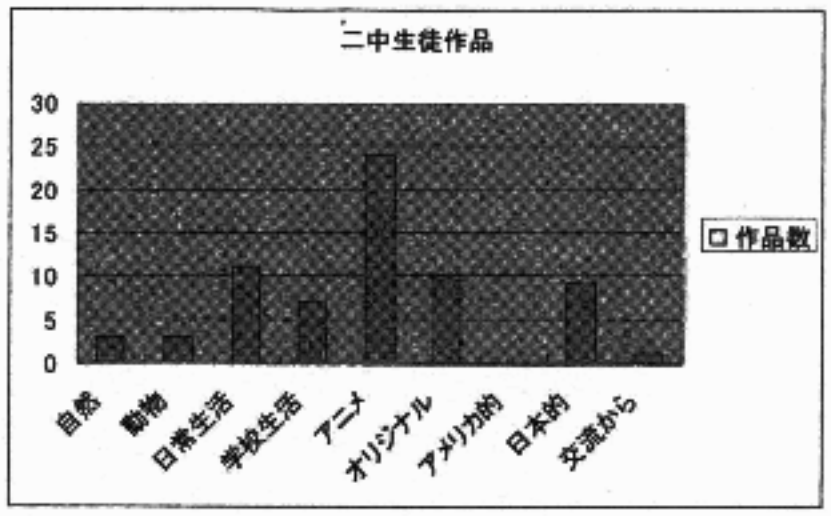
ア　日本の生徒の作品（鳴門市第二中学校2年生68人の作品）

a．内容に関して

二中の生徒は作品を仕上げる前に宿題として4コママンガのあらすじを考えておく課題をしていたので、作品制作にうつるまでの時間は短かったように思う。題材に関しては、アニメやテレビゲームのキャラクターを主人公にしている生徒が非常に多い。マンガの影響をかなり受けているということがいえるかもしれない。また、キャラクターを正確に描写しているので絵画の技術的なセンスは非常に高いと考えられるが、キャラクターを考えることに関してオリジナリティに欠けるといえるかもしれない。自然を扱った作品は、流れ星に願いを言ったり、木が出てきたり、蟻地獄を題材にしていた。この作品は、蟻が蜘蛛の糸によって助けられるといったハッピーな結末をむかえる。動物を扱った作品には、犬が登場する。犬が生徒にとって大変身近な存在であることが考えられる一方、他の動物や自然と触れあう機会が少ないのだろうと思った。日常生活を扱ったものは、スキーをしたり、トイレでの出来事だったり、汚れるのがいやだから雨であっても傘を使わないとか、しゃっくりを留めようとして驚かされ息まで止まってしまったとか、誕生日プレゼントが蛇だったとか、刑事の失敗、ほのぼのとした兄妹げんか

などを題材にしていた。学校生活を扱ったものは、修学旅行でカメラのシャッターを押してと頼むとおじさんは自分を撮ってしまったとか、行くの go と友達の名前の豪の語呂合わせをしたり、部活動のことについて（サッカー、野球）描いていた。スポーツをするだけでなく、例えばサッカーであれば、ボールが当たってカツラが取れたり、蹴ったボールが恐そうな犬に当たり追いかけられたり、野球では打ったボールが地球を一周してピッチャーに取られるといった笑いも含まれている。アニメのキャラクターを扱ったものは、スキーで滑りすぎて木にぶつかったり、正義の味方アンパンマンやドラえもんが登場したり、クーというキャラクターがドングリの木の下にいて風によって落とされた沢山の実が頭に当たり、痛い目にあうという展開の作品もあった。この中にはリンゴを食べて筋肉マンになってしまった『白雪姫』もある。オリジナルなものは、携帯電話のメール、切手貼りのおばけ、惑星によって地球が滅亡するとか、避けたところの落とし穴に落ちる、車に追突されそうになったおばあさんが車より速く走って逃げたといったものがあった。日本を紹介するような作品には、『布団』、「お年玉ちょうだい。」といわれた人が腹痛を訴え聞こえない振りをするという『お年玉』、寿司屋で「たこといか。」と注文すると素材そのままが出てきて仕方なく食べる『すし』、『忍者と侍』、「うどん屋さんできつね。」と注文したら、動物の狐がうどんにのって出てきたという『きつねうどん』、どんなケーキがいいか兄弟げんかをする『クリスマスケーキ』、年齢より豆を食べ過ぎた赤ちゃんが登場する『節分』、河童の登場する『落とし穴』などがあった。日本の交流をもとに考えられたものは、登場する生徒がアメリカ人と日本人であるという『銅像』があった。項目別に分類すると以下のようになった。この項目の中で、アメリカ的なものを扱った作品がなかった。この原因の一つは、あらすじを考える時にアメリカのことを扱ってもいいと私が助言しなかったことであると思われる。二つ目の原因としては、生徒は日本のことを知ってもらおうという意識が強かったが、アメリカのことを知る機会が少なかったと考えられる。確かにこの作品を仕上げたのは、昨年度であり、私の渡米より以前のことになる。今年度のバーカー先生の訪問により、生徒はアメリカやノースカロライナや交流をしているラグビーミドルスクールのことをより深く理解できたと思う。今後4コママンガを作成するという活動をするとすれば、きっとアメリカ的なものと分類したところの数が増えるのではないだろうか。

自然を扱ったもの …… 3作品
動物を扱った作品 …… 3作品
日常生活に関連しているもの …… 11作品
学校生活に関連しているもの …… 7作品
アニメのキャラクター …… 24作品
オリジナルなキャラクター …… 10作品
アメリカ的なもの …… 0作品
日本的なものや日本を紹介するもの …… 9作品
日米の交流からでたもの …… 1作品



b．言葉の使い方に関して

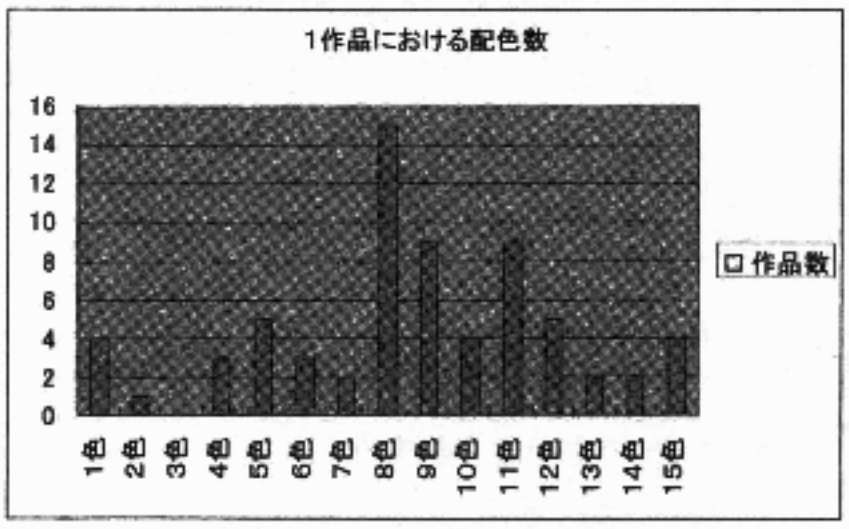
本校の生徒は、マンガを読む機会が多いためか、制作中に擬態語や擬音語を英訳したいという者が沢山いた。また、生徒は英語を習いはじめて約二年になるので、既習の英語や未既習の英語であっても辞書で調べ、なるべく沢山の英語を使って表現しようとしているのが分かった。これは自分が表現しようとしていることを作品を見ている人に分かってほしいという気持ちの表れではないのだろうか。また、私がこの作品をラグビーミドルスクールの生徒たちとの交流の材料にしようということを話していたので生徒たちがそれに答えてくれたのだと思う。交流の支えになるのは、やはりこういった自分のことを知ってもらいたいとか相手のことを知りたいという気持ちではないだろうか。

c．色の使い方に関して

日本人の色に対する意識としてよくあげられるのが太陽の色である。太陽は赤というイメージを持つ日本人が多いそうだが、太陽を絵の中に描いていた10人中、赤色は2人、黄色は2人、オレンジ色は3人、赤とオレンジの混合色は3人だった。全体的な色のバランスをとるためか、あるいは色に対する感覚が違ってきて

いるのだろうと思った。全体的に丁寧、カラフルに作品を仕上げており、1作品の中で使用している色の数は以下のようになった。これは色鉛筆やペンなど必要なものを生徒が準備できていたことと、作成時間が十分あったことによると思われる。

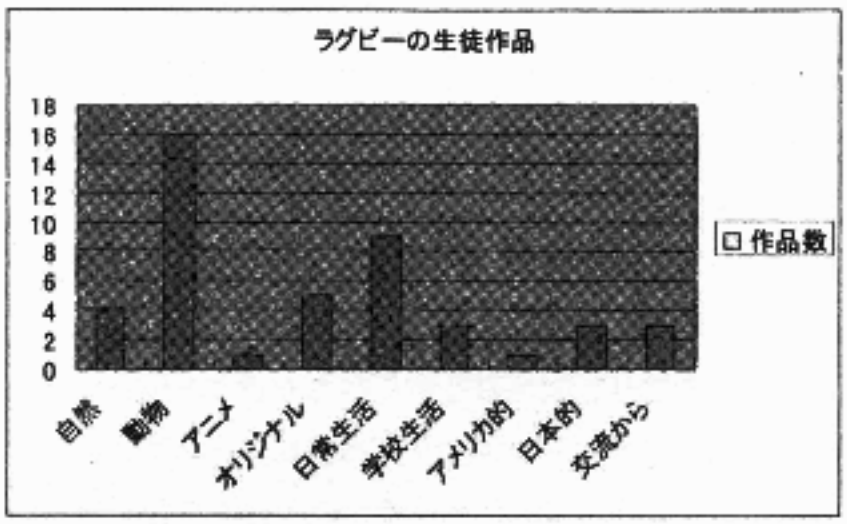
1色…… 4作品	9色…… 9作品
2色…… 1作品	10色…… 4作品
3色…… 0作品	11色…… 9作品
4色…… 3作品	12色…… 5作品
5色…… 5作品	13色…… 2作品
6色…… 3作品	14色…… 2作品
7色…… 2作品	15色…… 4作品
8色…… 15作品	



イ　アメリカの生徒の作品（ラグビーミドルスクール7年生45人の作品）

a．内容に関して

全体的にみると、自然や動物を題材にしている生徒が非常に多い。動物を扱った作品は、食物連鎖に関するものが多かった。動物愛護の精神が表されているものもあった。これは学校周辺や学校が位置する地域に沢山の自然があることによるのではないだろうか。オリジナルなキャラクターを扱った作品は、格好いい正義の見方Super Bobが前方不注意でビルにぶつかったり、蜘蛛人間が登場したり、紙とペンがゲームをしたり、王様と息子が登場するといったものがあり、バラエティにあふれていた。日常生活を扱った作品は、洗車のこと、散髪屋さんでの出来事、刑事の物語、魚釣り、友達のこと、かくれんぼ、逃亡すること、旅行すること、お金に関してなどがあった。学校生活に関連しているものには、フットボールの試合のことや、生徒と校長先生が雪合戦をしたりする作品があった。アメリカの文化を知ることができた作品の一つに『歯の妖精』がある。歯がぬけた子供が寝ている間に『歯の妖精』が来て25セントを枕元に置いていくという話だ。『美しい山』という作品はブルーリッジマウンテンを紹介するものとなっている。また、『かくれんぼ』には、リンゴの木がさりげなく描き添えられていた。ノースカロライナの生徒ならではという作品である。日本的な題材を使った作品には、空手、ポケットモンスターやドラゴンボールのキャラクターを使ったものがあった。二校の交流を通して得たことが表れている作品は、宇宙旅行の目的地が日本であったり、前述の『美しい山』や『モールへ行こう』は登場人物がアメリカ人と日本人になっている。それも日本人の名前は、文通をしている二中の生徒の名前であることに感動した。自分の作品を文通相手に送りたいと考えている生徒もおり、～さんへと書き込んでいる生徒もいた。また、作品の中には『なぜ～か。』という疑問形のタイトルでマンガを展開している生徒もいた。例えば、『どのように虎は獲物を捕らえるか。』『なぜペンギンは飛べないか。』『なぜカメレオンは体の色を変えるのか。』国語のクラスでポートフォリオを見せてもらった時に、このような形で研究し、レポートにまとめているものがあった。常に疑問に思うことに対し、いろいろな方向から論理的に考え、答えを見いだしていく力は、まさに現在の日本の教育に求められている『生きる力』といえるのではないだろうか。また、1時間の授業であらすじを考えるところから始まり、作品を仕上げるのは、やや無理があったと思う。色を塗れていない生徒がいたのは申し訳なかった。



自然を扱ったもの…… 4作品
動物を扱ったもの…… 16作品
アニメのキャラクター…… 1作品
オリジナルなキャラクター…… 5作品
日常生活に関連しているもの…… 9作品
学校生活に関連しているもの…… 3作品

アメリカ的なものやアメリカ
を紹介するもの …… 1作品
日本的なもの …… 3作品
日米の交流からでたもの …… 3作品

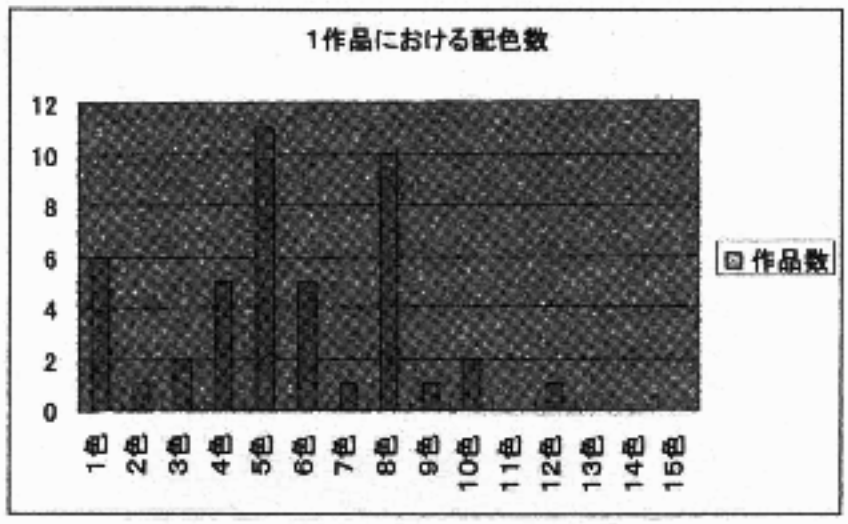
b．言葉の使い方に関して

時間とも関係があったように思うが、やや語句は少な目である作品が多いように思う。日本の生徒に比べ、使う言葉は母国語なので教師に質問する生徒もおらず、自分の考えを日常使っている言葉で素直に表現したという感じがした。また、セリフでなくあらすじを書いていくという手法を使っている生徒もいた。

c．色の使い方に関して

色の比較でよくいわれるのが太陽の色である。太陽を描いた12人のうち、黄色が9人、オレンジ色が3人であった。またその中で、太陽がオレンジでその光線を赤で表している生徒が2人、太陽が黄色でその光線をオレンジで表している生徒が1人いたが、赤い太陽を書いている生徒は一人もいなかった。また、人の目の色に注目すると、4人が青色で色を塗っており、赤で塗っている生徒も1人いた。目の形に注目すると日本人らしき登場人物は細い目でただの線で表されており、つり上がっている。アメリカ人らしき登場人物はドングリ目でぱっちりしている。よく外国の新聞や雑誌に描かれている東洋人はこのようであるが、まさにそれだと感心した。人の髪の色に注目すると、茶色、黄色で塗っている生徒が多い。また赤で塗っている生徒もいた。動物の目の色に注目すると、猫の目をオレンジに、蛇やライオンの目を赤に塗っている生徒がいた。また、建物に注目すると、青い壁に黒い屋根に赤のドア、水色の壁に青の屋根、水色の壁に茶色の屋根、水色の壁に赤の屋根、茶色のれんが風の家などとてもカラフルに仕上がっていた。非常に興味深かったのが、空に浮かぶ雲の色である。日本の子供は、空自体を青色や水色で塗り、雲はおそらく白色で塗ると思う。しかし、ラグビーミドルスクールの雲を描いた7人の生徒のうち、空を青系の色で塗り、雲全体を白色で塗っている生徒は2人、青色の雲は2人、水色の雲は3人だった。光りの反射している部分と陰の部分のどちらに注目するかによって色の捉え方は人にそれぞれ違うと思うが、雲に対してこのような色の使い方をするのは、やはり色に対する感覚が日本のそれとはだいぶ違っているからだろう。1作品の中で使用している色の数は以下のようになった。丁寧に塗れていない作品が多かったり、使った色が少ないのは、やはり作成時間が不十分だったことが原因の一つにあげられると思う。

1色 …… 6作品	9色 …… 1作品
2色 …… 1作品	10色 …… 2作品
3色 …… 2作品	11色 …… 0作品
4色 …… 5作品	12色 …… 1作品
5色 …… 11作品	13色 …… 0作品
6色 …… 5作品	14色 …… 0作品
7色 …… 1作品	15色 …… 0作品
8色 …… 10作品	



ウ　日米の生徒作品の共通点

a．題材に関して

主人公として使っているキャラクターがディズニーのプーさんである作品を仕上げた生徒が1人ずついた。刑事物語という題材を使っている生徒も1人ずついた。展開の部分は、ヘリコプターで追跡をして犯人を捕らえるというもの（ラグビー）と、刑事が腐りかけた床を踏み抜いて落ち、犯人を取り逃がす（二中）という違いはあるが……。

b．展開に関して

起承転結の第3場面まで質問のくり返しをするということがあげられる。『湖へ行こう』（ラグビー）という作品は湖に行こうと考えたシマウマが蝶や蛇やライオンや象に出会うたびに「どこへ行くの。」と尋ねられる。同じような展開として、『あなたは誰ですか。』（二中）という作品で、分かっている人の名前を執拗に尋ねるという内容だ。

c．結（おち）の部分に関して

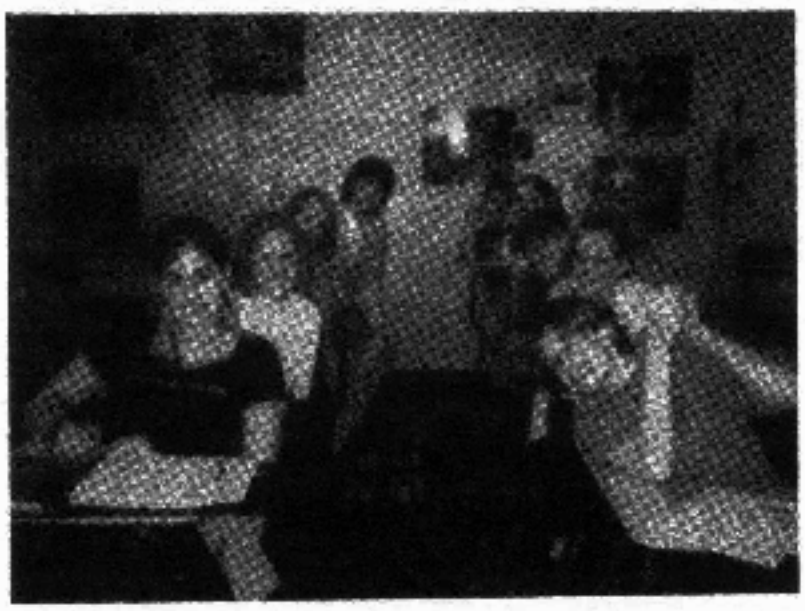
ぶつかる、落ちるといった結末で物語が終わっている作品が両校ともある。ぶつかる結末のものとしては『スーパーボブ』（ラグビー）という作品でヒーローが前方不注意で敵にぶつかる内容になっている。『不幸』

(二中)も同じくスキーをしていてスピードの出しすぎで止まれず、前方の木にぶつかるというものだ。落ちるということに関しては、『落ちていくこと』(ラグビー)は川を越えることができずに川の中へ落ちる内容がある。『池に飛び込む蛙』(ラグビー)という作品も浮き草から浮き草へ飛べずに池に落ちる。『落とし穴』(二中)は騙されまいと跳んだ方に落とし穴があり、見事に罠にかかる。『木に登ろう』(二中)では一所懸命登った木の上でバランスを失って落ちる。『ドラえもん』(二中)はドラえもんのタケコプターの電池が切れて優雅な空の散歩は終わる。『ジャンプ』(二中)は谷間を越えようとしたが失敗し、落ちる。同じ結末を迎える作品がたくさんあったということは、日本で通用する笑いのおちが海外においても通用するのではないかということと、文化は違っていても同様の考え方をする生徒たちがいるということの表れだと思う。そして今後交流を深める中で、生徒同士で理解できあえることはまだまだあると思う。

エ　日米の生徒作品の相違点と生徒作品から学ぶこと

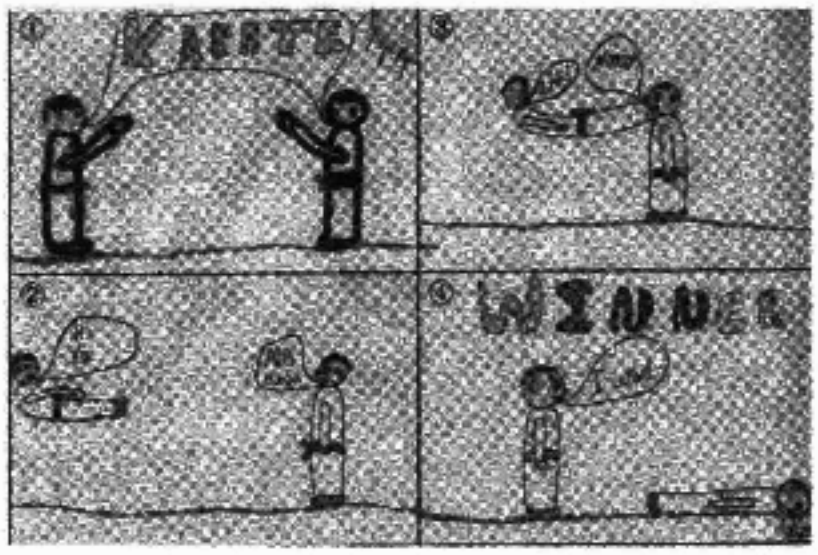
二校の生徒の作品が内容、題材、色、言葉や表現方法に関して違いがあるのはある意味当然のことである。生徒たちが育ってきた文化や社会が違うから。また、人は一人一人違うから、いろいろな場所で生かされているのであるから。違いを排斥するのではなく、違いを個性として受け止め認め合うことが、大切だと思う。今後のラグビーとの交流を深めて行く時に、この考え方は生徒たちにとても必要だと思う。

〈授業の様子〉

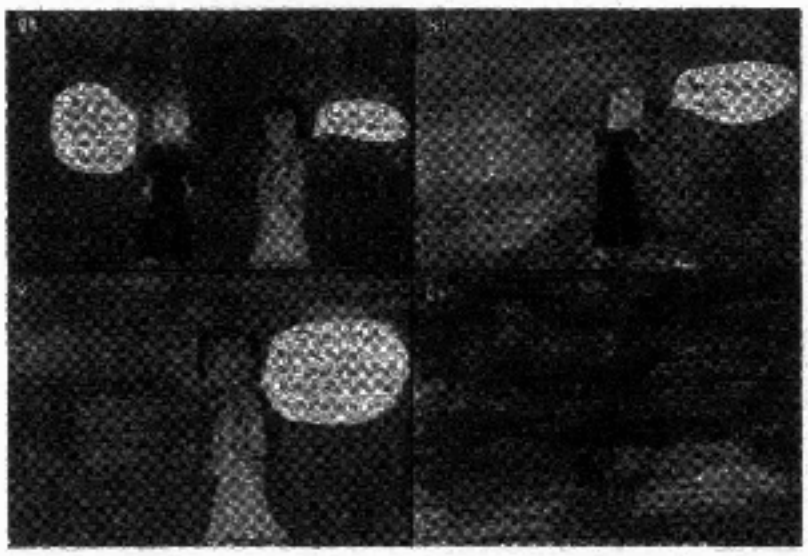


〈両校の生徒作品〉　ラグビーミドルスクール

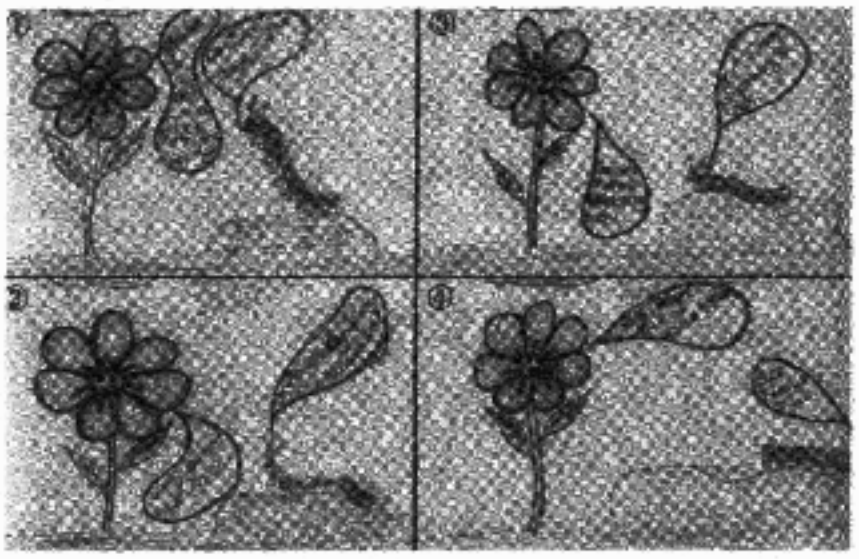
『空手』



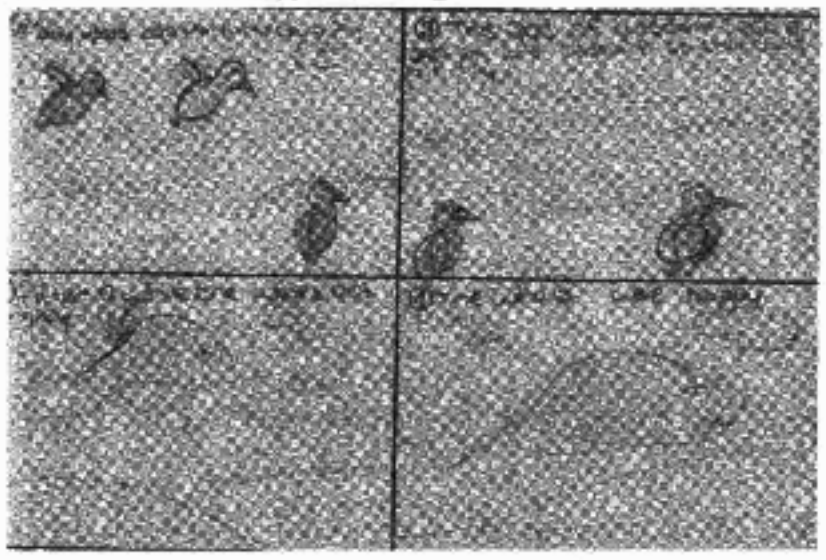
『美しい山』



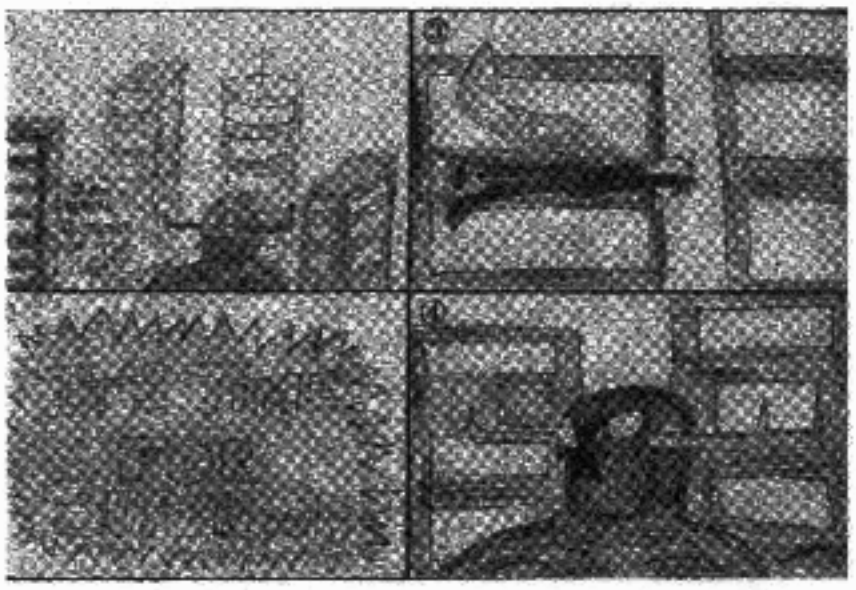
『自然』



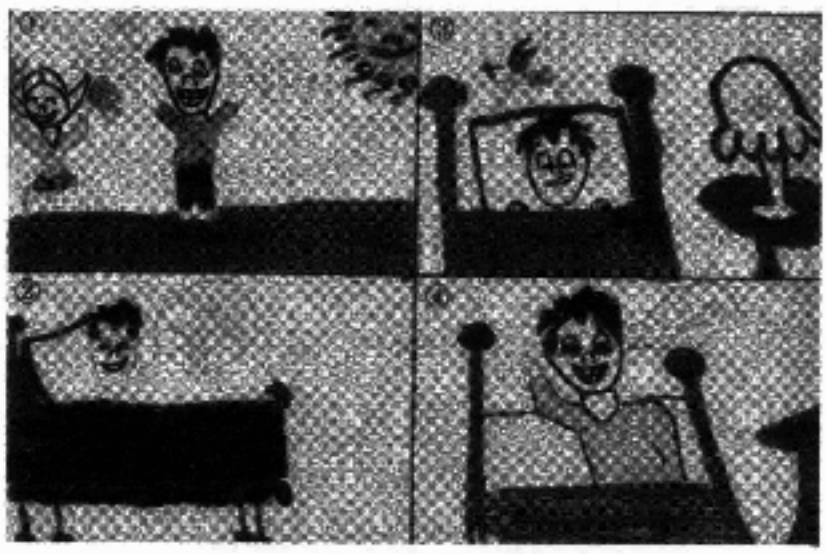
『なぜペンギンは飛べないか』



『スーパーボブ』

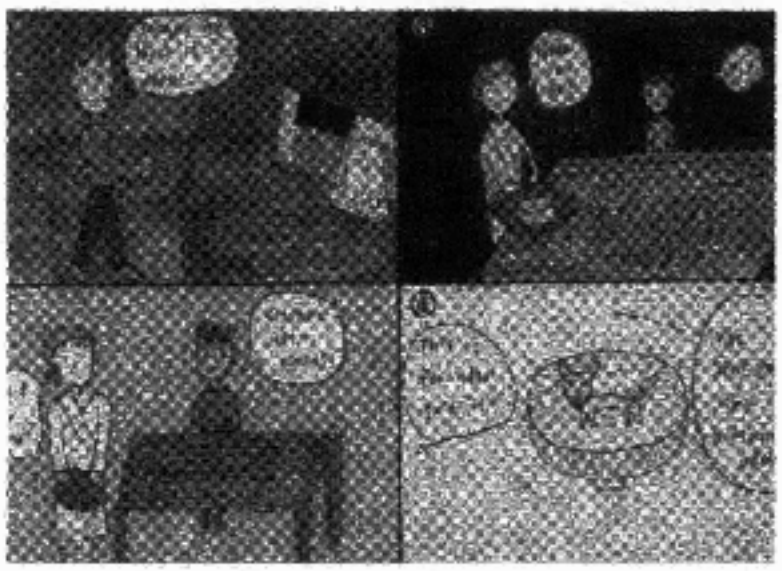


『歯の妖精』

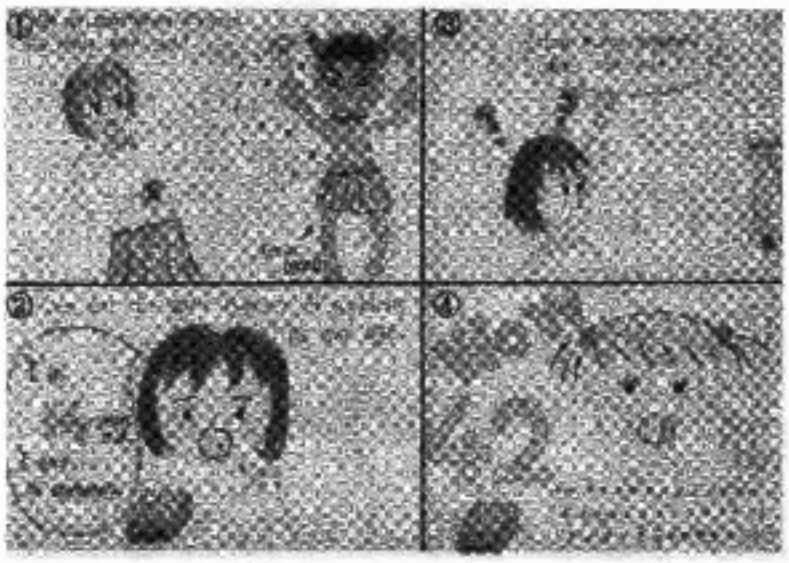


〈両校の生徒作品〉　鳴門市第二中学校

『きつねうどん』



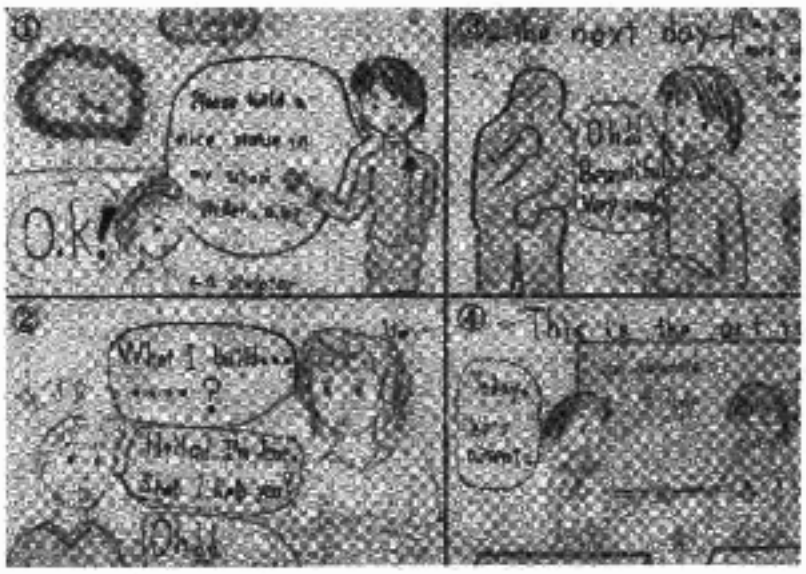
『豆まき』



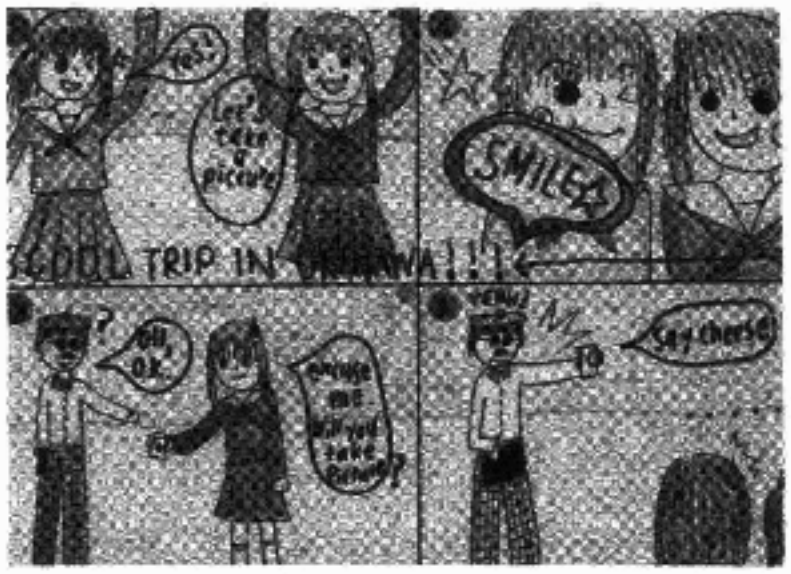
『不幸』

『危険』

『銅像』



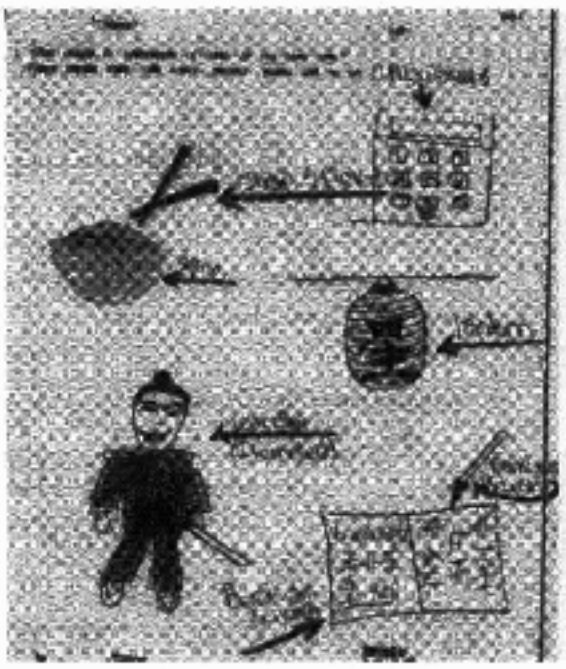
『写真』

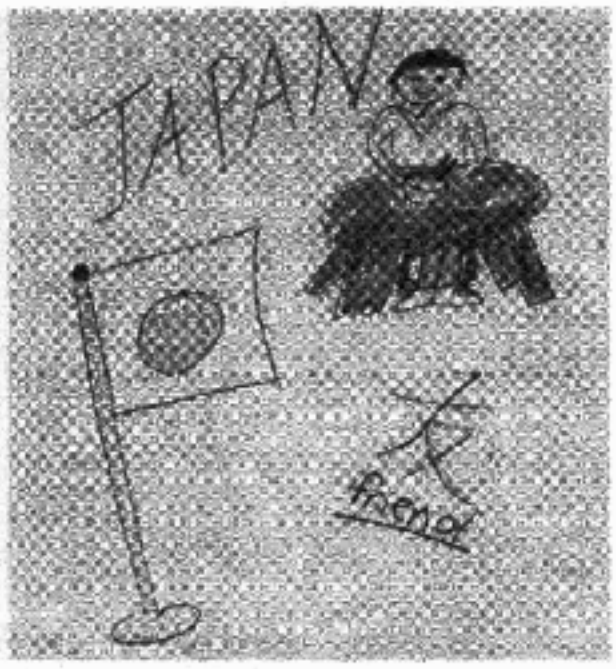


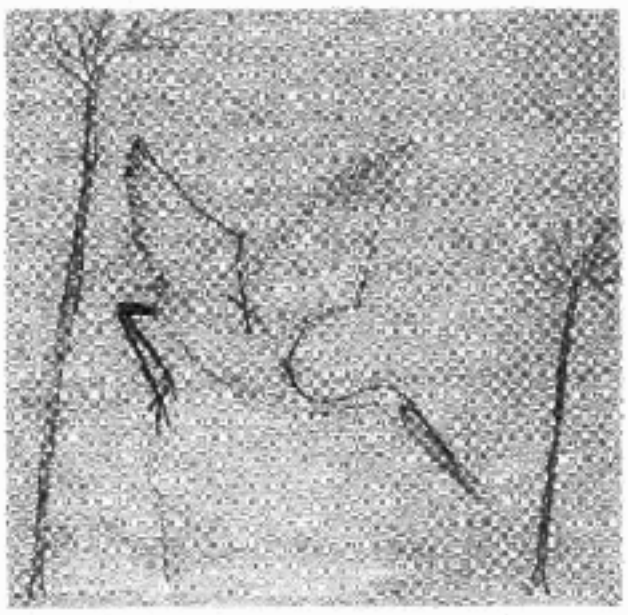
③　アンケート結果から見えてくるもの

アンケートは、27日のローラ先生の授業でしてもらった。46人分だが、3に関しては複数解答の生徒もいる。アンケートの質問事項は、以下の通りである。

1　今持っている日本のイメージや印象はどうですか。色や絵や詩などで表現してください。
2　日本へ行きたいですか。日本へ行って何をしたいですか。
3　ひまな時は、何をして楽しんでいますか。
4　大人になったら何になりたいですか。理由を書いてください。
5　アメリカの生徒と日本の生徒の相違点と共通点は何ですか。
6　日本の友達に一言。

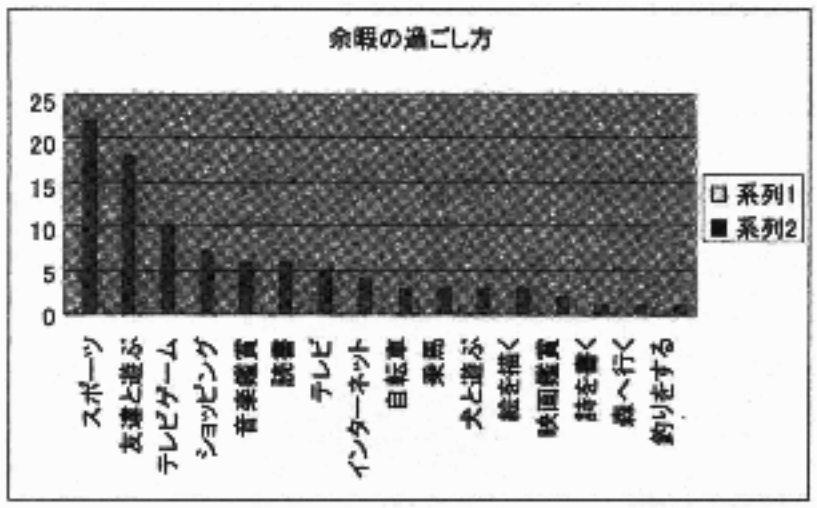






特に1、3、4に注目したい。1については、私が授業で紹介したことを日本のイメージとして捉えている生徒が多かった。この点からも生徒と直接触れあうことができ、日本のことを知ってもらうことを目的とした授業を実践できたことは、一つの交流の架け橋ができたのではないだろうか。

3の解答は複数解答である。スポーツをする22、友達と遊ぶ18、テレビゲームをする10、ショッピングに行く 7、音楽を聴く 6、読書をする 6、テレビを見る 5、インターネットをする 4、自転車に乗る 3、乗馬をする 3、犬と遊ぶ 3、絵を描く 3、映画を見る 2、詩などを書く 1、森へ行く 1、つりをする 1となった。日本の生徒と余暇の過ごし方は似ていると思うが、興味深かったのは乗馬をするという解答だ。二中の生徒の中にそういう過ごし方をしている生徒はいないのではないだろうか。生徒とそれを取り巻く環境の違いによるのだろう。



4については自分の興味あることや得意とすることあるいは経済的なことを考えて色々な職業名が挙げられていた。これも複数解答である。例を挙げると、スポーツ選手（フットボール 3、バスケットボール 4、体操 1、スケートボーダー 1、ボクサー 1、ゴルフプレーヤー 1）、コンピューター関係（エンジニア 1、ゲームデザイナー 3）、芸能人（歌手 5、俳優 4）、画家 1、作家 2、教師 1、刑事 1、医療関係（医者 1、フィジカルセラピスト 1）、動物関係（トリマー 4、動物園の経営 1）、インテリアコーディネーター 3、ファッションデザイナー 2、建築家 1、空軍の兵士 1などである。

(3) 最後に

今回の研修を通して学んだことはたくさんある。それを両校の生徒たちにフィードバックすることで、生徒たちがお互いの考え方、表現の仕方、学校、社会、文化などを学び合うことができると思う。また、それを今後のラグビーミドルスクールと鳴門市第二中学校の生徒たちが交流を深めて行く糧となるようにしたい。

グローバル・パートナーシップの展開
－Flat Rock Middle Schoolの訪問を通して－

鳴門市北灘中学校　教諭　　森　　義雄

(1)　はじめに

本校では、一昨年度の６月にグローバル・パートナーシップ・プロジェクトでFlat Rock Middle Schoolより、Ms. Lisa先生をお迎えして米国ノースカロライナ州の教育についてお聞きすることができた。昨年度に続いてFlat Rock Middle Schoolに訪問をすることができ、友好関係を深める良い機会ができたと思う。今回の訪問では、昨年の訪問時に実施した折り紙の授業と徳島県の藍染めを実施することで、生徒の国際交流のきっかけとなって欲しいと考えた。

また、両校の交流と教員の研修に結びつくような内容になることも希望し、訪問時の計画を立てることとした。

(2)　授業、学校環境を通してみえてくる国際理解

①　国際理解のための予定と準備

研修校（Flat Rock Middle School）での授業

１日の授業数を３コマ～４コマ（１コマ…90分）行うように計画した。この交渉は、インターネットによるＥメールの交換で決定した。授業内容と実施順は、次のⅠ～Ⅲのとおりとした。

Ⅰ　学校紹介及び情報交換
Ⅱ　藍染めの実習と地域文化
Ⅲ　折り紙
…各学年１コマずつ実施

それぞれの授業内容については次のとおりとした。

Ⅰ　ビデオによる地域と学校紹介

ビデオの内容…徳島県の阿波踊り
北灘中学校の位置
北灘中学校周辺の環境
（海、山と住宅の様子）
学校生活（授業風景、給食、清掃、部活動紹介、バス通学のようす）
校内行事（底引き網体験学習）
地域の行事（ボランティア活動）
北灘中学校の生徒からのメッセージ

◎　情報交換

北灘中学校についての質問に答えるとともにFlat Rock Middle Schoolでの特徴のある取り組みについて聞く。

Ⅱ　藍染めの実習

◎　説明

内容…北灘中学校での取り組み（実習風景）
鳴門教育大学の協力
地域のボランティアに生かしたこと

◎　藍染めの作品（巾着など）紹介

◎　藍染めの実習

内容…ハンカチ大の綿布を染める。
（身近な素材・道具を用いての染色）
・輪ゴムで布を縛って模様をつくる。
・割り箸を用いて模様をつくる。
・型紙を用いる。
※　生徒の工夫を引き出せるようにする。

準備…市販の藍染料、輪ゴム、割り箸、型紙

準備していただくもの…
電子上皿てんびん、薬包紙、薬さじ、樹脂製バット、蒸留水、綿布（ハンカチ大のもの）、ドライヤー、スティックのり、八つ切り画用紙、カッターナイフ

Ⅲ　折り紙

内容…兜、風船
時間があれば、もう１種類つくる。
※Flat Rock Middle Schoolの生徒が希望するもの１つ。（数種類の中から選ぶ。）
※全員の生徒が折れるようにようにする。

準備…市販の折り紙、折り方の説明書（英語）

準備してもらうもの…新聞紙

②　授業実施の目的

ビデオによる徳島県と北灘町および北灘中学校の紹介では、徳島の地域性と中学校での活動の様子から米国との違いを確認し、生徒の関心がどこにあるのか知ることにした。また、そのことから、交流のきっか

けを発見することにした。

藍染めでは、藍染料の奥深い色合いを体験してもらい、以前に徳島県の産業の一つとして発展した伝統芸能が今も引き継がれていることを知ってもらう。また、藍染料と環境への影響について意見を聞くこと、6th Grade Band～8th Grade Bandの各学年によって染色の方法がどう違うかを知り、研究に生かしたいと考えた。

折り紙では、説明書を英文で表して生徒全員が折れるようにした。6th Grade Band～8th Grade Bandの各学年と、北灘中学校の3年生を比較することにした。

③　学校紹介のビデオによる質問と藍染め・折り紙の北灘中学校との比較

Ⅰ　学校紹介のビデオに対する米国側からの質問

内容で学校に関係したものは、

○　北灘中学校では琴の他に何を演奏するのか。

○　空手部はあるのか。

○　サッカーチームはあるのか。

○　生徒が給食で好きなものは何か。どんなおかずが好きか。

○　朝、何時に学校へ行くのか。

のようになっている。部活動と給食、登校時間を自分たちと比較したいと思っているようである。Flat Rock Middle School の学校生活の様子を一部、北灘中学生に伝えているが、詳しい様子を伝えていないので、2学期には、生徒から米国側への質問ができるようにしたい。

他の質問は、米国と日本の比較をする内容のものがほとんどであり、自分たちの文化との共通点と相違点に興味がある。

Ⅱ　藍染め

6th Grade Band

染色の説明を近森先生に英語でしていただいた。生徒は説明をよく聞いており、積極的に作業をしている。綿布を染色液から出すとき、他の生徒が手伝うなど協力をしている。たいへん仲が良くて授業の雰囲気も良い。綿布についた余分な染料を洗うが十分に落とせていない生徒もいた。

7th Grade Band（19名、男子5名・女子14名）

7年生ということもあり、染色のための型紙の模様を工夫して作っていた。私が用意した3匹のイルカの型紙を4～5匹のイルカに増やしたり波を入れたりしている。全員の仲は良く、協力的である。応用や工夫をして時間を有効に使って次々と染色をくり返した。

8th Grade Band（18名、男子12名・女子7名）

子供の雰囲気は大人に近くなっている。最初にMr. Mckay先生から紹介があって、近森先生が染色方法の説明をした。このとき、型紙を用いた染色方法と綿布の両サイドを輪ゴムでとめて染める方法について、演示をしながら行った。授業の前半は、輪ゴムを使用したり、割り箸を使用する生徒が多くいて、私が作った型紙を使う生徒はいない。綿布を輪ゴムで縛った後、座席の前列から順に染色液に漬けに行っている。特別な指示をしなかったが自分たちで考えて行動をしているようである。型紙を用いて染める生徒が授業の後半からでてきた。7分間で4名の生徒が型紙を使いだした。

学年が上がるにつれて、他人の作った型紙をそのまま使用することに抵抗を感じている。初めての染色だが、道具を使用して模様をきれいに出している。日本の中学校と高等学校で、藍染めの授業を実施したが、模様の出し方は、米国の生徒の方が上手である。周囲の人手伝ってもらって輪ゴムで綿布を縛る生徒は見あたらない。

Ⅲ　折り紙

北灘中学校では、「蛙」の折り紙を行った。準備物として折り紙用の用紙、図と英文で表した説明用紙を用いた。実施後、アンケートをとり、次の結果となった。

実施：第3学年25名

◎　完成にかかった時間は何分か。

10分未満 …… 5.9%

10分～20分 …… 23.5%

20分～30分 …… 53.0%

30分以上 …… 17.6%

◎　折り紙をするときにどのようにしたか。

図だけを見て折った …… 63.6%

英文を読んで図を見ながら折った …… 13.7%

級友に教えてもらいながら折った …… 18.2%

図を見てわからない時だけ英文を読んだ …… 4.5%

◎　折り紙の英語説明（文章）は理解できるか。

少し理解できる …… 52.4%

全部理解できる …… 0%

全くわからない …… 47.6%

◎ 折り紙をするのに苦労したか。

苦労する …… 86.4%

普通 …… 13.6%

簡単だった …… 0%

今回、実施した「蛙」の折り紙は、生徒がふだん折っていないもので、折り方が難しいものを選んだ。Flat Rock Middle Schoolの生徒と近い状況において、生徒の様子をとらえるとともに、国際交流で日本の文化を伝えるには、相手国の言葉に訳して伝える必要があることを知らせるためである。

なお、Flat Rock Middle Schoolでの実施方法と気がついたことは次のとおりである。

6th Grand Band（生徒数20人）による折り紙（兜と風船）

新聞紙で見本を示しながら日本語で説明をしていく。全員が折り方をしっかりと見ている。生徒が難しいと思っているところは、兜の前立ての三角を作るところであった。兜の実物を持ってきて日本の文化も併せて説明すると教育効果があると考えられる。兜をかぶるときに向きを変えている生徒もいた。皆、微笑んでおり、指導をした近森先生と私も少し満足がいった。

7th Grand Bandによる折り紙（兜と風船）

全員が椅子に座れないので、床に座って折り紙をする生徒もいた。床に座って授業を受けることに違和感をあまり感じないように思われる。世羅先生と小野先生が来られて生徒に話しかけ、折り紙の指導をしていただいたので、生徒はたいへん喜んでおり、熱心に折り紙の製作をした。手先が器用なのか、速い生徒は10分ぐらいで作品を完成させて頭にかぶっていた。

8th Grand Bandによる折り紙（兜と風船）

世羅先生と小野先生、近森先生が生徒に話しかけながら、折り紙の指導をしてくださった。Flat Rock Middle School の先生方も集まってきて、いっしょになって折り紙をしている。8th Grand Bandの生徒は、昨年、松浦先生が来校したときに折り鶴を折っており、手慣れている生徒もいる。スクールバスの時間いっぱいまで折ってくれていた。助け合いながら折っている生徒もいれば、熱心に折り方を聞いている生徒たちもいる。

どの学年も、熱心に折り紙の製作をしている。低学年は、説明をしながら実際に折っているところを見て、真似る生徒が多いが、高学年になるほど、説明用のプリントを見て折る生徒が増えている。7th Grade Bandと8th Grade Bandは、説明用のプリントを見て自分ひとりで折り上げることもでき、10分以内に折り上げる能力もあった。

説明用のプリントを自主的に用いて学習する姿勢が見られることは、日米ともに同じである。最後まで折り上げるところはすばらしい。

④ Flat Rock Middle Schoolの学校環境

廊下には、日本の俳句を説明した用紙と生徒の作品が貼ってあった。日本の国語を学習しており、生徒が交流をすすめるときに、お互いの作品を交換できる。また、お互いの考え方を知るきっかけにもなる。

俳句の説明

HAIKU

a 3-line poem from Japan

total of 17 syllables••

5 in the first line, 7in the second,

5 in the third usually about nature

生徒作品例

BERRIES

BLOWING FIELD OF BLUE

BERRIES DANCING IN THE WIND

SWEET SMELL OF bERRIES

BY : HOPE CACLE

私が参観させてもらった教室には、色紙（習字で書いた漢字）を飾ってあり、縦書きの漢字に興味を持っている。

(3) 姉妹校提携に向けての取り組みと経緯

① 出発前

Eメールの交換で訪問時の授業について意見交換等をした。メールの返事がすぐに返ってこないこともあり手間取ったが、授業の準備物を用意してくださった。事前に姉妹校締結の段取りをとっておけば、交流を軌道にのせることができていたと反省している。

② 来校

北灘中学校が姉妹校を結ぶ意志が強いことを伝える

と、Flat Rock Middle Schoolの校長先生も姉妹校締結に向けて前向きであるという意志表示をされた。しかし、Flat Rock Middle Schoolに勤められている先生方の意見を聞いてからという返事であった。もし、先生方が姉妹校を結ぶ必要がないと答えれば、難しくなってくる。

③　帰国後

英語による折り紙を北灘中学校で実施してから、積極的に英語を学習し、インターネットでＥメール交換（英語）の練習をする生徒が出てきた。北灘中学校を訪問してくださった外国人講師の方と継続的なＥメールの交換をしており、姉妹校を結んだときに相手校の生徒とＥメール交換ができると思う。

米国のMiddle Schoolは、長期休業に入っており連絡がとりにくかったが、９月になると休みも終わり新学期が始まっているので、Ｅメールｋ交換を実施していきたい。

(4)　今後の交流計画と課題

①　交流計画

しばらくは、生徒作品をデジタルカメラで撮影してＥメールで送り、もし可能ならば、生徒の感想や作品を送ってもらいたい。静止画の交換は容易にできるが、動画の交換に発展させていくことも考えている。

第二段階は作品実物や教科書類を交換し、お互いの教育に対する意見交換もしたい。また、生徒どうしのＥメール交換を軌道にのせたい。

第三段階として校外での生活の仕方や風景、観光地の紹介などを取り入れた地域性のある交流をしたい。両校の教員が交流を持つことも大切である。

第四段階として、同じ教科の担当が共同研究をすすめる。

まずは、姉妹校締結の手続きがとれるように連絡をとっていきたいと思う。

学校紹介のビデオによる質問や北灘中学校で実施する藍染め・折り紙の比較をして、国際理解教育と両校の交流に生かしたい。

②　課題

姉妹校締結を結んでいない現在、生徒がお互いの詩（英語に訳したものも作る）や絵などの作品をＥメールや郵便で交換することができるか、北灘中学校で教員の移動があったときも継続的な交流をすすめるために姉妹校締結は、是非必要となってくる。

一部の人が、英語で文章をつくってFlat Rock Middle Schoolにメールを送ることに不安を感じている。しかし、英語力を身につければ、意見交換は可能なので英語の勉強も兼ねて挑戦するように助言したい。北灘中学校の誠意がFlat Rock Middle Schoolの先生方に伝われば必ず理解をしてくれると思う。また、いろいろと教えてくださることもわかった。英文でＥメールを送るとき、事前に英語の先生に英文の確認をお願いするときもある。このとき、快く引き受けて添削にも気をつかってくださるのでありがたく思っている。

日本の学校における教育方法と環境教育〈実際と課題〉
－北灘中学校と米国の小学校・中学校・高等学校の比較を通して－

鳴門市北灘中学校　教諭　　森　　義　雄

(1)　はじめに

米国と日本では、教育に対する考え方に相違点もある。しかし、教育は、子供たちに生きる力を身につけさせ、将来の生活を安定させることも一つの目的だと考えている。そのために、どういう教育方法をとって子供の可能性を伸ばしているのか研究したいと考えた。

また、世界的に自然破壊や酸性雨などの環境問題がクローズアップされている。日本の中学校においても環境教育が重要視されており、自主的に水質検査、水生生物調べや空気中のNO_xの測定などを行って、地域ぐるみの活動へと広げている学校も多い。今回のグローバル・パートナーシップ・プロジェクトをとおして、ノースカロライナ州の小学校、中学校、高等学校での環境教育への取り組みについても研究し、北灘中学校の環境教育に生かしていきたいと考えている。できれば、活動内容やデータの交換などして生徒の視野が地元の環境だけにとどまらずグローバル的なものの見方に結びついていくようにしたい。

環境教育は、他の分野の教育との結びつきが強く、教育方法の一環としてとらえることが大切と思われる。したがって、個別研究のテーマを「教育方法と環境教育」として環境学習が教育の中にどのように組み込まれているかについても調べたい。

(2)　研究の概要

①　研究方法

教育方法（学校教育への取り組み）

米国の小学校、中学校、高等学校が児童・生徒にどのようにして『生きる力』を身につけさせているのか、そのためには多くのアプローチの仕方があるように思われる。それぞれの学校が教育目標を達成し、生徒を伸ばすために、どういう教育方法をとっているのか、１校だけに限らず、多くの学校との共通点や相違点を見つけ、その有効性について考える。

環境教育

ノースカロライナ州の小学校、中学校、高等学校の環境教育への取り組みを分析して北灘中学校の取り組みと比較し、学校教育に生かす。また、米国の学校の取り組みと北灘中学校の取り組みの接点を見つけて意見交換へ発展させる方法を探る。

さらに、環境学習が教育の中でどのように位置づけられているか考える。

②　現地調査の日程

日　　時	場　　所	内　　容	教育方法 or 環境教育
3 /26 9 : 00～12 : 00	Fairview Elementary School ①	◎授業参観 ◎ワイルドウォッチプログラム ◎7th Grade Bandの理科授業	教育方法 環境教育
3 /26 13:00～15:00	Smoky Mountain High School ②	◎授業参観 ◎質問 ◎ソーラーシステム、電気自動車	教育方法 環境教育
3 /27～ 3 /30	Flat Rock Middle School ③	◎授業参観 ◎先生へのインタビュー	教育方法 環境教育
4 / 3	Exploris Middle School ④ Exploris Museum	◎授業参観 ◎資源の再利用	教育方法 環境教育

(3) 研究の結果と考察

① Fairview Elementary School

「書くこと」を重点にした教育を展開しており、児童は生活発表会で自分たちが取り組んだことを保護者の前で発表するという目標を持っている。

しかし、書くことを重点としているが、コンピュータのパワーポイントを用いたプレゼンテーションの方法を4年生から学ばせ、発表練習と質問に答える練習を2年生から行うなど学習方法を計画的に組んでいる。効果的な教育方法を確立するために教員どうしが毎日、研修を持って計画を立てている。

各教科の授業をしているが、教科書の内容を単純に教え込むのではなく、そこに生徒の発達段階に応じた教育方法を取り入れている。私が観察したことで教育方法の工夫をしていると感じたことは次の3項目であった。

Ⅰ Readingの授業は文学教材を用いて感情豊かな児童を育てている。

Ⅱ 数学は道具を使うことで基礎的な能力の発達を促し、次第に紙と鉛筆を用いて計算能力などの思考力を身につけさせる。

Ⅲ 地域の様子を調べたことをまとめたり、動物や植物の観察で感じたことを文章表現することで、社会や理科を数学や読み書きの中に統合している。

他の場面でも教育の仕方に工夫があり、次に示す環境教育にも、国語、社会、理科などの統合的な学習方法がとられている。

自然環境に触れさせたり、環境問題について考えさせる場面が、校舎の周囲に多く設されている。その主なものは、

Ⅰ ピクニックエリア……

プラスチックのリサイクルによってできたテーブルと椅子を設置している。

※ 資源の再利用について児童に考えさせることが、自然環境の保全にもつながる。【国語、社会、理科】

Ⅱ ワイルドウォッチ……

野外の環境教育実験場のようなものである。トレイルという子供達の歩く道が整備されていて、途中に虫を飼っている所や野生の花のエリア、池、自然の滝のようなものがある。高台があり、その下には、小さい動物が入ってこれないネットがある。子供達が座るベンチもあり、バードウォッチングができるようにしてある。遊歩道を移動することは、体育のフィットネスの運動にもなるそうである。

3年生の活動例

彼らは実際にいろいろなものを見ることで、自然に関する詩を作る。これは、環境と理科と国語を統合したものである。

カリキュラムフェアのテーマがwritingとreadingなので、それとドッキングさせるための活動である。

※ 日本の学校で作られているビオトープは、活動範囲が狭いが人工的に作った池には、自然に生物が集まってくる。Fairview Elementary School では、大型の活動エリアを造ることで、生物の観察だけに終わることなく、自然をいろいろな面からとらえることができている。【国語、理科、体育】

Ⅲ グローププログラム……

7年生と8年生が参加していて、酸性雨やpHを調べ、データをコンピュータでアメリカ農務省管轄の部所へ送っている。

※ このプログラムに参加している日本の学校もある。このプログラムに参加することで、Fairview Elementary Schoolの児童と北灘中学生が意見交換をもつことができると思う。年齢差は少しあるが、同じ取り組みや目標に向かって活動することが接点になることもある。

各地域の酸性雨の状況やpHは、世界的に比較したり原因を考えることで、その解決策だけでなしに汚染物質の移動などを知ることもできる。【理科、技術】

7年生の環境学習では、生徒が「環境問題」というテーマで、「オゾンホール」、「地域の工場から出る煙の自然への影響」など地域の自然についての課題を見つけて、まとめ上げている。各生徒が作った発表用のパネルは小学校の時から学習してきたコンピュータを用いて、すべてワープロ文字で打ち出してあった。実際に実験をした結果も用意されており、学習の深まりを知ることができた。

環境問題を多面的な見方で考えるには良い方法であり、他の生徒の意見を聞くことにより考えの

幅を広げることができる。

Fairview Elementary Schoolでは、国語や理科、社会、体育を環境教育と結びつけて、児童の思考力や鑑賞能力を伸ばす計画も立てている。日本の小学校における生活科や中学校の総合的な学習でも「環境」というテーマで実践可能であり、実際に似たことを行っている学校もある。学校や地域の特性を生かした教育方法をとっている。

② Smoky Mountain High School

高校教育は卒業後、職業についたり専門的な知識を身につける進路（2年制のコミュニティー大学、4年制の大学）にすすむ生徒がいるため、多様な教育方法が行われていた。

生物の授業では、大学レベルの内容が行われており、授業後に10問テストとレポートを提出するようになっている。レポートの内容は、目的、測定対象、実験の基準、科学的データを入れるようにしており、生徒の思考力を高めるだけでなく、授業のまとめ方や知識の定着をはかるようにしていると思われる。

職業コースでは、テクノロジー、ヘルスケアー、チャイルドケアーなど幅広く教えており、ソーラーシステムの利用や電気自動車の研究など環境に関する内容もある。

スマートボードやコンピュータなどの機器を用いた授業もあって、学習能率を上げている。このことが黒板で表現が難しいことを可能にしている。

生徒は、自分の進路を履修の手引きを見て自ら考え単位の修得をしている。個性を伸ばしていく1つの手段である。日本の高等学校では、ほとんどが普通科高校と職業科高校を分けており、違いがみられた。

③ Flat Rock Middle School

数学の授業（Ms. Corwn先生）では、全体指導と個別指導を行い、生徒の考える力をつけている。指導方法の主なものは、次の5点と思われる。

Ⅰ　ＯＨＰを使用して、数学の問題をペン書きし、計算方法を答えさせる。このとき、理由を発言するように指示をしている。

Ⅱ　解答することができれば、誉めることで生徒のやる気を起こさせている。

Ⅲ　全員に質問できるように速く授業をすすめる場面もある。

Ⅳ　生徒に配布したプリントには、基本的な計算方法と応用を記入してある。

Ⅴ　生徒に計算問題を与え、机間巡視をしながら指示をする。

半数近くの生徒が挙手をしており、指示と答えの引き出し方が速い。授業のすすめかたは速く感じられた。不等号の問題では、数直線で不等号の確認をしておいてから問題を解く。

授業の最後15分間は、個別の課題に取り組むようにしている。このとき、能力の高い生徒には、コンピュータや実験器具と計算機を用いて複雑な計算に取り組ませている。

学期末になると、Henderson County Public Schoolの共通テスト問題を解いている。

ノースカロライナ州の共通テストは、1～4の4段階の評価をしており、4は10%、3は80%、1と2は合わせて10%ぐらいの生徒がいる。1と2の評価をとった生徒はHigh Schoolへ行けない。

全員が、全力で計算問題を解いているように思われた。普段の授業計画がうまくいっていると考えられる。基礎・基本の確認と定着を目標としているところは、数直線を使用するなど時間をかけて全員の学力がつくようにしている。数学は、速く正確に解くことが必要とされるため、生徒に速く答えさせている。

家庭科は、週に1回が必修となっており、消費や生活技能を身につける時間である。家庭科室は、奥にキッチンコーナーがあり、入口側半分には、机や椅子、コンピュータが9台ある。

2つのグループに分かれて授業をすすめている。9人がデスクに着いてビデオで研究をしており、そのあとレポートを書いてまとめるようにしていた。また、別の9人が調理実習をしており、スクランブルエッグを他のどのようなものに置き換えて調理するか考えていた。授業時間が45分間しかなく、簡単なことしかできない。パソコンには、衣食住に合ったソフト「At Ease Items」が入っており、ゲームをしながら、どういう授業についたらよいか自己判断できるソフト（例：移住の道「オレゴントレイル」）も入っている。

調理実習を授業で行う場合、日本では全員が同じ課題（料理）について、グループごとに授業をすすめていくが、この授業のように2つのグループが別の学習

をすすめる方法をとるとき１人の教師が指導すると指導が十分にできないのではないかと考えられる。しかし、短時間でできる学習内容を選んでおり、レポートなどを使ったまとめ方を事前に指導しているので、生徒の活動状態も目標をもったものになっている。

理科の授業（指導者：Ms. Lisa先生）では、ビデオ（ＩＳＮという科学ニュース）を視聴し、環境について話し合いを持ち、時に油流出について考えていた。水資源を身近なものとしてとらえるような工夫として、家庭の水道料金について聞いていたが、知らない生徒もいる。井戸水を使用していると答えている生徒もいた。

教室内でのビデオを用いての環境学習をすすめている。この学習の続きをどうするか、確認をしなかったので考察は難しいが、地域の自然を題材にできる授業に発展させることで身近な自然と環境とのかかわりが、さらによくわかり自主的な発展学習にすすむと考えられる。

スペシャルクラス（学習障害）では、特別に教師がついており、英語を第二母国語とする一部の生徒も学んでいる。

ＩＳＳ（インスクールサンペンジェス）

学校のルールを破ったり、けんかをしたり、喫煙、先生に対して反抗的、授業や学校に出てこない生徒については、校長先生と副校長先生が特別クラスで学習をするかどうかを決定し、一般的には３日間、長くても１週間を越えない範囲で入室させる。このクラスの人数は16人までであり、特別に教師がついている。

学力保障の面から考えると必要な場合もある。ＩＳＳでは、短期間での更生が考えられており、人権についても配慮されている。

④　Exploris Middle School（Exploris Museum）

すべての生徒が決められたスケジュールをこなしている。テーマ学習が毎日行われており、生徒がテーマを自分で決めて行う。次の２つが特徴的なものになっていた。

Ⅰ　グローバルアート……

芸術、体育、外国語（スペイン語、フランス語）の中から、どれか選ぶようにしている。

Ⅱ　プライムグループ……

10人ぐらいの生徒が自分で１週間の目標を立てて、目標が達成できたかどうかを確認する。評価は、ポートフォリオなどを用いて家庭との連絡をとるようにしている。

壁には生徒作品がたくさん展示されており、切り絵で世界地図をつくったり、ホロコーストに関する作品を仕上げている。

体育館での体育の授業は、ペットボトルをピンにして、ボールを転がし倒す。ボーリングゲームを取り入れている。

Exploris MuseumはExploris Middle Schoolに隣接しており、生徒の学習の場となっている。世界の文化を中心にした博物館であり、地理的なことだけでなく、人口についても研究されている。世界的な資料がそろっており、中学校で学習する内容を深めることができる。この施設には、ティーチャーリソースセンターがあり、民族の伝統について触れたり、アンネフランクのコーナーでは、彼女が住んだ家の模型や当時の状況がよくわかるようになっている。環境に関係したコーナーでは水の浄化方法や資源の再利用について実物を展示して具体的にわかるような仕組みとなっている。

Exploris Middle Schoolは、Exploris Museumを学習の場とすることで生徒が自主的に調べる姿勢や探究心を養うことを目標としている。日本では、学習目標を達成するために博物館や科学館等の施設へ出かけて行くが、Exploris Museumでは、必要なときだけ学習をすることができるのは、大きな利点だと考えられる。

(3)　課題と展望

訪問校での授業の観察をする時間が限られており、私の偏った見方や考え方も、研究の考察の中に入っているかもしれない。また、訪問校の先生への質問も限られており教育方法や環境教育の両方において記したことが十分とはいえない。本レポートに示した内容で間違いがあったり、誤解を招く表現があれば、訂正しなければいけない。

授業内容については、米国と日本で相違があり、内容ごとの比較は難しい。また、校種が違うと教育方法も違ってくるため、一般的な教育方法についての課題を考えてみた。

Fairview Elementary SchoolのReadingとWritingは、日本の読み書きを大切にした教育にもあてはまる。どの教科でも、言葉による表現は重要であり、学習時には重点をおいた指導をしている。しかし、日本の中学校では各教科の枠をはずして横断的・統合的な学習

をすすめることはあまり実施されていない。総合的な学習で行われている程度である。そこで他教科との連携を取り入れた授業で、生徒の可能性を伸ばし、生きる力に結びつけたい。また、環境学習では、環境問題についてさまざまな角度から考えさせて発表をすることで、限られた時間内に多くの内容を教えることができる。この方法は、インターネットや図書室の本を調べることで可能なことであり、日本でも実際に行われている。しかし、全員がコンピュータを使用してパネルにワープロの文字でまとめる方法をとっており、北灘中学校で実施すると、多くの時間がかかってしまう。小学校から中学校にかけて一貫した教育計画を立てて行う必要が感じられる。

今、考えているのは、グローブプログラムに参加して、酸性雨について学ぶことと異校種間の交流の接点を見つけることである。北灘中学校では、地域の環境について生徒と共に現地調査をしてデータを集めてきた。お互いの学習の進め方や活動を紹介して、視野を広げるとともに新しい活動方法も見つけたいと考えている。

(4) おわりに

北灘中学校では、総合的な学習の実施において、「生きる力」を身につけさせるために電話による応対や地域に出かけてのマナーの在り方、授業で学習したことの応用を取り入れた活動をして、その中間報告やまとめとして保護者や地域の方の前での発表会を持つようにしている。生徒は、半年間の活動の中間報告をすることでいろいろな意見を聞き、自分たちで考え計画を立てていくことを身につけている。日本の小学校においても総合的な学習は行われているが、今回の米国の学校で行われている総合学習は、教科横断的、統合的な要素を多分に含んでいた。

今回の訪問では、訪問校が4校と限られていたが、どの学校とも友好的な関係を持ちたいと思う。しかし、中学校間では友好的に情報交換が行えても、小学校や高校との交流や意見交換は、教師間だけにとどまってしまい、生徒どうしの交流は難しいと考えられる。しかし、同じ活動内容から接点を見つけて研究をすすめていけると考えている。今回の訪問で米国の学校から学んだことを北灘中学校の教育に取り入れていきたい。